

『リミテッドラヴァー』

著：かわい恋

ill : Ciel

金曜の夜、ドアチャイムの軽やかな機械音が、待ち人の来訪を告げる。

空に星が瞬く頃、市街地の中心部の広い公園内にそびえるタワーマンションの最上階で、ヴィンセントは“恋人”を心待ちにしていた。

シチュエーションとしては、二人で暮らしている部屋にツバサが帰ってくるところからスタートすると言われた。いくら互いに試験と自覚しているとはいえ、研究室で「これから恋人です」などと引き会わされるより、よほど自然でありがたい。

ドアモニターで確認すると、カメラを少し見上げる位置でツバサが立っていた。シャツにデニムを身につけただけの、その年代らしい格好だ。

小づくりの顔はそれぞれのパーツが嫌みなく完璧に並び、どんな色だろうと想像していた瞳は、虹彩まで人間と変わらない淡い茶色だった。

好意を持って、恋人らしい親密そうな笑みでドアを開けて迎えた。

「おかえり、ツバサ」

ツバサはヴィンセントを見て、胸を衝かれたように目を見開いた。

「ツバサ……？」

知らない人間だと思ったのか？ ヴィンセントの情報はあらかじめインプットされていると聞いているが。

ツバサはみるみる瞳を潤ませ、力いっぱいヴィンセントにしがみついてきた。

「あ、会いたかった、ヴィンセント……！」

ここまでの反応は予想外で、少々面食らう。いくらヴィンセントが大好きな恋人と刷り込まれているとはいえ、大袈裟すぎではないか。

だがとりあえず自分のことはわかっていると知れて安心した。まだ起動したてで不安定なのかもしれない。

恋愛経験豊富な自分は、こんなことでうろたえたりはしない。細い肩を震わせてヴィンセントの胸に顔を埋めるツバサの背を、そっと抱きしめる。

泣いている子にはキスが効果的だ。

なだめるように頭のでっぺんに唇を落とすと、甘い髪の匂いがした。キスの感触に顔を上げたツバサにやさしくほほ笑んでみせる。

「ただいまと言ってくれたら嬉しいな。夕食を用意してあるよ」

ツバサはなにかを探るようにヴィンセントの顔を見つめていたが、すぐにはににかんだ表情に変わって視線を伏せると、浮いた涙を手の甲で拭った。

「ごめんなさい……。ただいま、ヴィンセント」

自分の行動に照れているように見えて、博士の研究室で生体溶液に浮かんでいるのを見ていなければ

ば、本当は人間なのではと疑ってしまうほどだ。

ツバサの声は想像より落ち着いた、やわらかい響きを持っていた。

ツバサの肩を抱いたままリビングダイニングへと誘う。

会社が用意してくれた部屋は、贅沢すぎるほど広くて設備が整っていた。

タワーマンションは円筒状に高くそびえていて、各階に一室のみという作りである。エレベーターが建物の真ん中を貫き、外に面する壁がすべて嵌め殺しの偏光ガラスになっているおかげで、公園や街並みを三百六十度見渡せる。

ダイニングテーブルに並んだとりどりの料理を見て、ツバサが感嘆の声を上げた。

「これヴィンセントが作ったんですか？」

ヴィンセントは笑いながら、サラダを皿に取り分けた。

「まさか。俺が作れるのはパスタくらいのものさ。ケータリングだよ。今日は初めて二人で過ごす夜だから、特別にね。明日からはパスタオンリーになるから、今夜はたくさん食べてくれ」

気を楽しませてやろうと軽い口調で言うと、ツバサの緊張していたらしい肩からわずかに力が抜けるのがわかった。

ロボットが緊張とは変な言い方だが、そう見えたのだから仕方ない。そんな反応も初々しくて、まったくよくできた人形だと思う。

「食べようか。座って」

本当に食べられるのかと訝しんだが、ツバサは人間と変わりなく料理を口に運んでいく。

背を伸ばして座り、きちんとした食器の使い方は、育ちのよさを感じさせる。

ヴィンセントは営業という仕事柄、和やかな空気を作るのが上手い。天気や料理の話など、当たり障りなく、返答しやすい会話を続けて緊張をほぐしてやる。

食事が終わる頃には、ツバサも愛らしい笑顔を見せてくれるようになった。

食後はリビングに移動し、ソファに座ったツバサの前に紅茶のカップを置いて隣に腰かける。

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです」

「それはよかった」

ヴィンセントが出した紅茶の香りをかいだツバサが、「いい匂い」と顔をほころばせた。

さりげなくツバサを観察する。

すんなりと伸びた手足と華奢な体、涼やかなうなじに十代特有の清潔な色香を感じる。

こうしていると、本当に人間と見分けがつかない。自分の意思で動いているのではないかとすら思ってしまう。

不思議な気分だ。この子が自分の恋人。

悪くない。酒を飲んだり駆け引きを楽しんだり、大人のデートはできないが、大人の「行為」はできる。日系人仕様なのは、同じ年齢でも東洋人は幼げに見えるから、そういうタイプを好む客向けなのだろう。自分からすれば罪悪感を持ちそうなギリギリの外見だが。

設定は“未経験”と言っていた。こんなたいけな子を好きにしていなんて、男の願望そのままだ。二カ月の間、楽しませてもらうとしよう。

紅茶を飲み干したツバサがそわそわと体を揺らし、甘えるような視線を向けてきた。

「あの……、もっと近づいていいですか」

くっつきたくてたまらない、という感じだ。

可愛いなど、素直に思った。でもこれがプログラムだと知っていると、いい歳をして人形遊びをしているようで心の中で苦笑する。

「いいよ、おいで」

両腕を広げると、嬉しそうにヴィンセントの腕の中に納まる。

幸せそうに抱きついてくるから、こちらまで幸せな気分が胸に溢れてきた。本当に自分のことが好きなんだなと思うと、どんどん可愛く見えてくる。

人間と変わらない体温と、やわらかな体。どきどきと鳴るツバサの心臓の鼓動が服越しに響いたとき、彼を知りたい欲求が急速に盛り上がった。

「ツバサ」

「はい？」

ツバサの頬を、指の背で誘うように撫でる。

「きみの肌が見たい」

ツバサは目に見えて頬を紅潮させた。そんな反応はとても作りものとは思えないほどリアルだ。

「……………、あなたが、望むなら……………」

小さな声でかろうじて呟く様は、恥じらっている無垢な恋人そのものである。

くすぐるように指で顎を持ち上げると、細い肩がビクッと震えた。不安そうに見上げてくる仔犬みたいな濡れた瞳が、情欲に火をつける。

ピンクの花びらのような口唇をやわらかく食むと、戸惑いながらもそこは薄く開いてヴィンセントを受け入れた。

「ん……………」

キスには自信がある。ヴィンセントのシャツの裾をギュッと握っている手を撫でさすって解き、指と指を絡めた。指の間をやさしく愛撫しながらキスを深めると、甘いため息とともにツバサの体から力が抜けていくのがわかった。

「好きです……、ヴィンセント……、好き……」

ツバサは胸の奥から愛情が迸り出たような声で、口づけの合間に呟く。好き、という言葉にふわっと甘い気持ちがあった。

一夜限りの恋の相手とでも、愛の言葉を交わすことはある。けれどあくまでその場の雰囲気盛り上げるためであり、相手もそれを承知で楽しんでいると知っている。

だがツバサはあらかじめヴィンセントを愛しているという感情を刷り込まれているせいで、偽りのない真摯な響きだ。

こんなに無垢な愛情を寄せられると、応えてやらねばという気にさせられる。

「好きだよ、ツバサ……………」

できる限りの情感を込めて囁くと、ツバサはキスに夢中になって、つないでいない方の手でヴィンセントの首を抱き寄せた。

ツバサの中に芽生えた官能の種火を煽りたてるように、わざと音をたてて舌を絡める。ツバサの腰が

ふるりと揺れて、自分から身をすりつけてきた。

ツバサの舌はもうヴィンセントの動きにすっかり馴染んで、まるでずっと前から恋人同士だったように自然な動きでキスを続ける。

シャツのボタンを一つ一つ外し、脇下に手を添えて小粒な尖りに親指を這わせた。

「あっ……」

小さな喘ぎとともに、触れていた唇が離れてしまう。

怯えた視線を向けられて、安心させるためにツバサの前の床に膝をついて座り、下から見上げた。

「怖がらないで。やさしくするから」

視線を下にしてやることで相手は落ち着くものだ。

ツバサはこくりと頷くと、無理をして作ったような笑みを浮かべた。

それがまるで、怖いけど我慢してます、という気持ちが溢れているようで、愛しさがぐっと募った。

恋人が求めるなら応じたい——その態度が相手にどれほど優越感と愛情を呼び起こすか、この子はちゃんと知っている。愛されるために生まれてきたのだから。

ツバサのシャツを開くと、滑らかな肌が露わになった。博士の研究室で見たときと同じ小さな桜色の先端は、緊張のためかすでに尖っている。

細い体を抱き寄せて胸粒を口に含むと、ツバサの体がビクンと跳ねた。

「ひゃっ……」

シャツの下に手を潜り込ませ、緊張で強ばる背を撫でるとかすかに汗ばんでいる。

緊張している、と思うと不思議な気がした。緊張するロボット？

いや、これはプログラムだ。そう反応するよう作られているだけ。

B I O - Vの高い技術は人工皮膚から汗をかかせることができる。皮膚を破れば人工血液を出すことも。眼球だって内臓だって、本物と遜色ないものを作り上げている。それが生体部品と呼ばれるものだからだ。

だが通常は欠損した部位を補う一部分を使用するにすぎない。けれどそれが丸々人間一人ぶん、このツバサに使われているのだ。まさにB I O - Vの技術の結晶である。

密着した胸から、早い心臓の鼓動が聞こえてくる。この薄い皮膚の下に、作りものの心臓があるのだ。

ツバサのことをもっと知りたい、もっと見たい。

体に手を添え、そっとソファの上に横たえる。ツバサは怯えと羞恥で潤んだ瞳でヴィンセントを見上げた。

「大丈夫、乱暴にしたりしない。全部俺に任せていればいい」

片手で頬を撫でると、手のひらに頬をすり寄せて甘えてくる。信頼している、と行動で訴えかけてくるいじらしさに、やさしくしたくてたまらなくなった。

そのまま手のひらで首筋を撫で、肩を剥いて肌を露出させる。

乳首の先端を指の腹で掠めると、ツバサの体がすくんで薄い胸が上下した。

「可愛いよ」

ツバサは赤く染まる顔を見られたくないように、握った拳で目もとと口もとを隠そうとする。

意図しているのかいないのか、脱げかけたシャツの袖が拳を半分隠しているのが、凶悪なほど愛らしい。

こうやって男心をくすぐる動きをするのかと、つい考えてしまう。

「顔が見たい。隠さないで」

やさしく両手首をつかんで開き、顔の横で押さえた。真っ赤な頬にキスを落とすと、仔猫のようにきゅっと目をつぶる。

あまりにも初々しくて、すでにヴィンセントのボトムの下で興奮が高まってきている。

顔を隠すなと命ぜられたからか、手を離してもツバサはそのままのポーズでヴィンセントを目で追った。羞恥の涙を浮かべながらも、デニムに手をかけても抵抗しない。

懸命に恋人の求めに応じようとする姿が健気で興奮を煽る。

デニムの前立てを開くと、下着越しにすでにツバサの性器が半分頭を持ち上げているのがわかった。見たい――。

これは精巧なセクサロイドに対する好奇心か、単純な性欲か。

「少し腰を上げて」

一枚ずつ脱がすのはかえって恥ずかしかろうと、下着ごとデニムをつかんでひと息に取り去った。

――思わず息を呑んだ。

ヴィンセントの目に晒された体の美しさ。

肉づきの薄い腰から、少年らしい無駄な脂肪のない脚が伸びている。日系人らしく、うっすらクリームがかかった温かい色合いを持つ白い肌には一点の曇りもない。

全体的に細身ながら均整の取れた長い手足は、血統のいい短毛の仔猫を連想させた。

その体に似合うサイズの性器も、まだ未使用の色と形状をしている。滑らかな下腹の上で膨れ始めたペニスの先端には、透明の露が結んでいた。

すべてがリアルで、もっと深い部分まで彼を知りたくなる。

「きれいだ、ツバサ……」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>